

「ポルトガル船隊の食糧政策（前）」（2020年09月08日）

ヨーロッパ人の中でアジアに一番早く進出して来たポルトガル人がアジアにある海洋のほぼ全域を活動と支配の舞台にし得た原因は、船や航海術あるいは武器兵器の優秀性などいくつかの要素があげられるが、ポルトガル人が海外で行った食糧政策も忘れてならないことがらのひとつだ。

ポルトガル人が民族をあげて海外への進出に向かった裏側には、ベニスが独占していたスパイスが影を落としている。スパイスはヨーロッパではるか昔から知られていたものの、その原産地についての情報はだれも知らなかった。ポルトガル人はその原産地へのアクセス路を追求したのである。

15世紀にポルトガル人は海へ乗り出して大西洋のあちこちの土地を奪い、植民地を作った。新たな領土を持つことのメリットはかれらに植民地主義路線がもたらす大きな栄光の夢を抱かせた。そこにスパイスが付加されるなら、小国ポルトガルがヨーロッパの大国に肩を並べることもありうる話になる。

1488年、バルトロメウ・ディアス Bartolomeu Dias が大西洋を下ってアフリカ大陸最南端の喜望峰に達した。1498年、ヴァスク・ダ・ガマ Vasco da Gama は喜望峰を回ってインド洋に入り、インドのカリカットに達した。インドのゴアにアジアの拠点を置いたポルトガルは、アフォンソ・ドウ・アルブケルケ Afonso de Albuquerque インド総督が1511年にマラッカを陥落させた。

マラッカからスパイス諸島への初航海がアントニオ・ドウ・アブリウ Antonio de Abreu の指揮する船隊によって行われたが、目的果たさず帰還する。しかし船隊の一隻が難破してアンボン島に流され、最終的にその船を指揮していたフランシスコ・セハウン Francisco Serrao が念願のスパイス諸島に到達したのである。

ポルトガル船が本国から航海に出る時、船に乗組む者ひとりあたり塩漬け肉15kg、玉ねぎ、酢、オリーブ油がひと月分の割り当てとして積み込まれた。船長には鶏肉と羊肉が追加された。カトリック教徒の断食や肉食禁止の時期には、肉の代わりに米と魚やチーズが用意された。

ワインと水それぞれ1.5Lは毎朝与えられた。水は飲用および料理のためであり、水は木製貯水器に保存された。

それは最初のひと月間だけだったのだ。それを過ぎると、食事のクオリティは大幅に劣化した。そのあとは、塩を利かせた乾パンが主食になる。しかしそんな防腐手段はた

いした効果をもたらさなかった。たいていの場合、乾パンは腐って悪臭を発した。ゴキブリのせいだ。おまけに木製貯水容器の水も容易に汚染した。下痢や感染症が船内にはびこるのは当然の帰結であり、その結果、発病する者や回復しないまま死亡する者が船内にあふれるのは普通のことだった。

ヴァスク・ダ・ガマの四隻の船隊に乗った160人の乗組員のうちの100人は壊血病で死亡した。この壊血病はイギリス人ジェームズ・ランカスター船長が1601年に予防法を発見している。

長期航海で必ず発生するこの食糧問題（新鮮な食糧と水の補給）にどの国も頭をひねったものの、なかなか名案は出現しなかった。七つの海に雄飛して覇権を競い合った諸国のいずれもが、この致命的な問題を抱えていたのである。

それぞれの国の船隊が取る航路にある港を奪って自国領にし、そこに食糧と水を用意しておいて、やって来る自国船に供給することはだれもが行った。そんな中でポルトガル王は航海に出る船隊に乗組んだ国民に特別のインセンティブを与えた。1518年5月18日に出された布告は、船隊が寄港地にした土地で下船し、現地の女を娶って家庭を作り、食糧生産に励む者に特別な待遇が与えられることが記されているそうだ。この制度はカサード casado と呼ばれた。[続く]

「ポルトガル船隊の食糧政策（後）」（2020年09月09日）

ポルトガル人にとっては元々、植民地で地元の女と家庭を築き、そこでポルトガルが求めている商品作物と主食になる作物を生産することが勧められていたのである。こうしてポルトガルの植民地には、自己のアイデンティティをポルトガル人と見なす混血児が続々と誕生した。

転農した元兵士たちは植民地の要塞やポルトガル人コミュニティの周辺に住み、同じ土地に住んで国王への務めを果たしているポルトガル人に食糧を供給した。その植民地が敵に包囲されて味方との連絡が断たれても、防衛軍の食糧がすぐに枯渇するようなことにはならなかった。

ポルトガル人は植民地を設ける場所を、このようなシステムと連携させて選択した。たとえばフローレス島が植民地に選択されたのは、そこが稲や豆類、ヤギやハチミツなど豊富な食糧が得られることが大きい要因になっている。帰農する人間にとって、容易

に食糧獲得の成果が得られる土地の方が、不毛の土地よりありがたいのは当たり前の話だろう。

理論上はそうであっても、その選択が的確になされたかどうかはまた別問題になる。フローレス島ララントウカ Larantuka をポルトガル人は食糧獲得の便利な土地と評価してそこに町を作ったが、後からやってきたオランダ人は痩せ地であると判断してそこを奪おうとしなかった。ポルトガル人にとっては幸運な結末だったかもしれない。

ポルトガル人はまた、植民地での商品作物と食糧の生産を原生種のものだけに限定しなかった。かれらの航路の寄港地で手に入った商品作物と食糧の種や苗を別の土地に持ち込んで、そこで栽培してみることを励行した。

1536年から三年間マルクの行政長官を務めたアントニオ・ガウヴォン Antonio Galva はブドウ・トマト・アヴォガド・キャッサバをマルクで栽培させている。マルク人はそのおかげで、それ以前の栄養不良状態が改善されたと言われている。

1545年ごろ、マルクのカピトウン、ジョルドン・ドウ・フレイタス Jordao de Freitas が地元民と戦闘状態に入ったとき、外部からの食糧補給が不可能になった。しかし要塞周辺で食糧が栽培されていたため、かれらは苦難な状況を克服することができた。

ポルトガル人が行ったその食糧政策がかれらの航路沿いの各地各国にその名残を今もとどめている。インドネシアに今も残っているポルトガル文化の影響の中には、庭に花を植えること、食べ物 srikaya, bika, ketela, pastel、保存食 acar、そして食器のフオーク garpu はポルトガル語 garfo がそのまま残されている。

その反対に、ポルトガル人が各地で知った食材・食品・調理法・味覚なども本国にもたらされて、ポルトガル料理に影響を与えた。ポルトガル王国は各地に旅立って行った軍船が帰国する際に、各地で見つけた珍しい動物と植物をリスボンに持ち帰ることを命じていたのである。[完]